

肉の可逆性はいかにして可能か？ ——「スタイル」論を手がかりに——

三宅 萌

はじめに

しばしばメルロ＝ポンティ哲学に向けられてきた典型的批判とは次のようなものである。彼の哲学とは一なる絶対者との「合一」¹⁾を目指すものであり、自他未分の癒合的關係へのノスタルジーに貫かれている²⁾。

この種の根源的一元性を強調するメルロ＝ポンティ解釈は、晩年の遺稿『見えるものと見えないもの』において集中的に論じられる「肉 (chair)」の「可逆性 (réversibilité)」³⁾という特性の解釈に由来すると考えてよい。身体をその典型例とする可逆性とは、「私の右手が、物に触れようとしている左手に触れる」(VI, 176/186, S, 215/II 21) という、触れる者と触れられる物との転換の可能性として描出される。単にあるものに物／精神や能動／受動といった両義的性質が認められるだけではなく、それらが転換し得ることが焦点化されるのである。またその転換可能性(可逆性)は、双方が「感覚的なもの (le sensible)」という一般性を共有しているがゆえに成立するとされる。この身体的自己の可逆的關係構造を拡張することによって、自己は他の感覚されうるものとしての他者と交流可能になるのである。

後期メルロ＝ポンティへと向けられる冒頭の批判とは、こうした一般性に依拠した肉の可逆性に対するものである。それについての再反論⁴⁾もまた、肉の一般性を拡張し、肉があらかじめ他者性を含み持つか、他者性に開かれたものであることを示すものが多い⁵⁾。

しかし問題はむしろ可逆性において、「感覚的なもの」を介し他者が到達可能なものとされているながらも、同時に他者性それ自体もまた担保されることの理路の解明にあるのではないか。身体に生じている根源的な再帰性としての可逆性が、他の感覚的なもの(他人や諸物)との関係にも敷衍できるのであれば、それは自己性と他者性の関係の問題である以上に、自己性と他者性とを可能にする体制の問題となるだろう。

そこで本稿は、メルロ＝ポンティ哲学において可逆的であるとされる自己性と他者性とは、「感覚的なもの」を介しどのような理路から共に認められているのかを検討する。読解の鍵となるのは、中期に練り上げられた「スタイル (style)」論である。

我々はまず、前期の主著『知覚の現象学』における感覚の議論に立ち戻り、同書において中心的な考察対象となる知覚と感覚とが、多様かつ互いに特異的な諸感覚と、その統一的な知覚という図式から整理されることを示す(第一節)。次に、スタイル概念が第一節で取り上げた「知覚的総合」を哲学的に深化させた他者の統一性(他者性)を示す概念であることを提示した上で、感覚的所与の統合における肉とスタイルとの関係を明確化する⁶⁾(第二節)。ここで、知覚主体のスタイル(自己性)が改めて問題になること、そして存在者に不可避的な「不変なスタイル (style invariable)」

と可逆性との関係を示す（第三節）。最後に、後期メルロ＝ポンティにとって肉がどのような哲学的意図のもと論じられることになったのかを踏まえ、肉の可逆性における自己性と他者性の、あるいは主体と客体の位置づけを解明する（第四節）。

一元論者として名高いメルロ＝ポンティだが、彼が哲学的方法論としてまず二元論的な記述から始め、両者を調停する行程を取っていたことも事実である。本稿もまた、知覚主体と知覚対象、自己性と他者性といった二項を導入し議論を明確化することを試みる。以上の手続きにより、後期メルロ＝ポンティ哲学を象徴する肉の可逆性を、あらゆるものが未分化な原初的混沌状態との合一というよりは、むしろ互いに重なり合うことがない多様とその統一とをめぐる緊張関係の議論として読み解くことが、本稿の眼目である。

1. 『知覚の現象学』における感覚与件の多様性と知覚的総合

メルロ＝ポンティは、『知覚の現象学』において知覚の分析と記述をおこなったが、ここで注目したいのは、前期以来一貫して知覚が感覚と区別される点である。本節では特に後者が集中的に論じられる『知覚の現象学』第二部第一章「感覚すること」の記述を振り返り、感覚的对象の「統一性 (unité)」をめぐる前期の立場を確認しよう。

ある対象を感覚する際の感覚与件は、眼（視覚）や耳（聴覚）、手（触覚）、舌（味覚）といった諸感覚器官に与えられる。感覚与件はそれぞれが互いに「比類ない性質」(PhP, 266/41) であるが、同時にそれぞれが「物の構造に自らを開くことで、互いに交流し合う (communiquer)」(PhP, 265/40) とも述べられる。主体が諸々の感覚器官を通してある物を感覚しているとき、物の多様な現れ、例えば物の見えと、物の聞こえとは、それぞれが独立した与件のはずである。それにもかかわらず、身体各感覚器官は感覚対象である「物の構造」⁷⁾ と呼ばれるものを通して交流し合う。それによって、主体におけるある物の複数の感覚与件が、一つのその物の諸感覚与件として経験される。

見えと聞こえといった感覚器官の差異⁸⁾に言及したのち、メルロ＝ポンティは続けて単眼視と複眼視、あるいは物の正常視と二重像へと議論の歩みを進める。ある物の片目による像と、両目による像とは厳密に言えば異なる視覚経験のはずであり、またある物を適当な距離からピントを合わせて見るか、ごく接近して二重に見るかもまた、異なる視覚経験といってよい。しかしこの時、我々は同じ物の異なる感覚経験として感覚与件を総合する。彼は、こうした現象を視覚の解剖学的構造に起因させるのではなく、知覚において複数の像が「物の自己性に集められる」(PhP, 269/45) からであると述べる。このような複数の、またそれぞれが互いに特異な感覚与件が主体において総合されることは、メルロ＝ポンティにおいて「知覚的総合」と呼ばれる。またこうした知覚的総合こそが、知覚が多感覚的であると呼ばれる所以でもある。他方で、感覚器官は身体内で「協働的 (synergique)」(ibid.) に働くため、対象は知覚において統一的なものとして現れるとも述べられる。しかし、ここまでの記述には問題が存しているのではないか。

つまり、統一化作用において原理的な審級が、知覚主体の身体にあるのか、知覚対象である物にあるのかは断定が避けられている。こうした知覚主体と知覚対象との関係は、どちらの統一性がど

ちらの統一性を基づけているのか——つまり身体の協働的統一と、物の自己性とはどちらが優位であるのか——を断定することが困難なものであるという彼の立場を示しているとも言えるが、これ以降のメルロ＝ポンティ哲学の深化に伴ってそれ自体重要な問題となることになる⁹⁾。

本節で我々は、比類ないはずの多様な感覚与件を統一的なものにさせる幾つかの概念が機能していることを確認した。そしてこうした統一性に関わるものが、中期において取り出される「スタイル」である。

2. 統一性としてのスタイル

ある知覚対象についての互いに比類ない複数の感覚与件は、主体において交流し、知覚において総合される。この統一をめぐる議論は、スタイル概念へと引き継がれることになる。そこで本節では、自己性であり他者性をなすスタイル論を参照し、肉との関係を探る。

スタイル概念を定義づけるにおいてしばしば参照されるのは、いわゆる中後期のテキスト群である『シーニュ』収録「間接的言語と沈黙の声」(1960)における、ある個人の個人らしさと知覚との関係についての記述である。引用しよう。

それ〔通り過ぎる一人の女性〕は、「個人的で、感情的で、性的な、ある表現」であり、ちょうど、弓の作る緊張がその木の全ての繊維の中に現存しているように、その歩みの中に、いやそれどころか踵が地面にぶつかる衝撃の中にさえ、全体として示されるような、肉であるということの様式 (*manière d'être chair*) である。〔……〕そこにあるのは、この世界に住まい、世界を処理し、顔や衣服、動作のしなやかさ、身体の惰性的な動きによって世界を解釈する、ある様式を示す徴標であろう〔……〕。(S, 67-68/I, 81-82)

一人の女性が出する「様式」にメルロ＝ポンティは、「知覚はすでにスタイル化している (*la perception déjà stylisée*)」(*ibid.*) さまを見て取っている¹⁰⁾。引用箇所を順に解釈していこう。

主体が一人の女性を知覚する場面が念頭に置かれている。この箇所においても、感覚与件の多様性とそれらにおいて全面的に現れる統一性とが問題化される。その統一性である女性の様式¹¹⁾とは、歩いている時の姿勢や歩き方、ヒールの音、歩くときに地面を踏み締めるその強弱といった、女性が歩く際に伴いうる全ての現れに全面的に示されている。しかもそのスタイルは、その女性がどのような個人であるか、どのような感情を抱き、どのように性的な個人であるかに関わるような、時間や場所において個別具体的でもあるスタイルである。言い換えれば、その個人がどのような個人であるかを示すスタイルとは、その個人を取り巻く歴史・文化的状況や個別具体的な生育環境、性、経験と密接に結びつくものである。そうした、その女性の固有性を示す表現は、単一的な一個の現れにおいてのみ示されるのではなく、あらゆる場面、あらゆる感覚的現れに一貫して見出される。この女性の自己性があらゆる場面で示されるものであることを指して、「肉である (*être chair*)」と述べられる¹²⁾。

ここでは、肉を「感じる－感じられる」という両義性の発生とする解釈では捉えきれない、統一

性をめぐる複雑な事態が生じている¹³⁾。むしろこの箇所の議論は、まさしく感覚与件が互いに独立であることと、その上である一貫した統一性が示されるという『知覚の現象学』以来の議論が、スタイルや様式という語を借りて語り直された上で、「肉である」ことと結び付けられていると解釈できる。そして、女性が肉として、すなわち多様な感覚与件に統一性を与える様式を示す存在者、ないしはそうしたスタイルそのものとして主体に知覚されるとき、「知覚はすでにスタイル化している」¹⁴⁾と述べられることになる。

ところで、ここでその通り過ぎる女性のスタイルを知覚する主体のスタイルについては、どのように論じられうるだろうか¹⁵⁾。

上で見たようにメルロ＝ポンティは「間接的言語と沈黙の声」において、スタイル一般がどのように行為に現れているかを論じている。しかしこの時、主体のスタイルがどのように干渉するかについての積極的な記述は見られない。主体にとって自身のスタイルとは「それと知らぬ間に生まれ出る」(S, 67/81)のものであり、スタイルを持つ行為とは、「自身のシルエットや日常の仕草のように、他人にとってははっきりそれとわかるが、当人にはほとんど見て取ることのできない表出の様態」(S, 67/80-81)なのである。すなわち、自己のスタイルは自己にとって意識的に把握できる対象ではない¹⁶⁾とされる。上述の「知覚がすでにスタイル化している」と述べられる際のスタイルが、知覚対象の女性のスタイルなのか、知覚する主体のスタイルなのかという問題は未解決に留まっている。

3. 感覚的なものの統一と移行

「肉」と、知覚されることを可能にするとともに自身の統一性をなす「スタイル」との結びつきは、晩年の草稿『見えるものと見えないもの』においても維持される。本節では、知覚におけるスタイルの介入についての後期メルロ＝ポンティの立場と、可逆性との関係を論じる。

知覚において、対象の統一性を見出すのは私の眼差しなのか、むしろ対象が統一性を構成するののかという問題が、中期までの議論では十分に焦点化されてこなかったか、少なくとも迂回させられてきたことを我々は指摘した。もし主体の知覚が原理的に対象の側によって可能になっているのだとすれば、主体が構成するという議論と同様に、他者の知覚、また他者とのコミュニケーション自体がそもそも問題とならないことになる。しかし、自己性と他者性との両者を認めた上でその交流可能性が問題となるのであれば、そこでの知覚は一体どのような理論装置によってなされるのだろうか。

この問題の解決に際して用いられるのがスタイルである。『見えるものと見えないもの』における、知覚的総合を可能にするものの記述を見てみよう。

眼差しは、あたかも見えるものと予定調和の関係にあり、それらと知り合う前からそれらを知っていたとでも言わんばかりに、己のぎこちない気ままなスタイルの中を自己流に動き回すが、それにもかかわらず、全く恣意的な見方をするわけではない。私は混沌を見るのではなく、物を見ているのであり、かくして命令しているのは眼差しなのかそれとも物なのかはついに言

うことができないのである。（VI, 173/184-185）

多様な視覚や触覚を一つに取り結ぶものがここまで議論してきた自己性や統一性であり、それは個別具体的な歴史や環境、性を持つスタイルとしての統一性なのだった。そしてここで、知覚主体と対象のスタイルの双方が明確に認められていることが明らかになる。知覚主体には知覚主体のスタイルがあり、物の見方は「自己流」であるのだが、それを踏まえた上でメルロ＝ポンティは主体の知覚における統一性をなすのが知覚対象なのか、知覚主体なのかは、「ついに言うことができない」と述べる。これは迂回ではなく、知覚の場面における主体と客体についてのかかなり明確な態度であると言えよう。

このような物の知覚は、「重なり合いなき同一性 (identité)、矛盾することなき差異、内と外との隔たり」（VI, 177/188）といった語で語り直される。視覚的所与と触覚的所与とは重ならず、知覚主体と知覚対象——それは、冒頭で確認した通り、典型的には触れる私と触れられる私でもある——もまた重ならない。

しかしそれにもかかわらず、「私」は統一的なものとして存在し、またある存在者についても同様に統一的一者として知覚し、また眼差すのである。知覚主体と知覚対象、あるいは自己と他者との隔たりを際立たせる統一性としてのスタイル論を介してなお、他者に到達可能であるとすれば、それはいかにしてか。『見えるものと見えないもの』の議論を参照しよう。

身体や精神を包み込んでいるのは、同一世界なのだ。もっともこの場合、世界というのは、我々の目に入ってくる、あるいは入りうる事物の総体であるばかりでなく、そういったものの共可能性の場であり、それらの遵守する不変なスタイル (style invariable) でもあると解してのことであるが。そしてスタイルこそが、我々各自のパースペクティブを結び合わせ、一方から他方への移行を可能にしてくれるのであり、そしてこのスタイルこそが、[……] 見える世界の中で我々各自の視点を交換しうる [……] (VI, 29/25)

先ほどの引用箇所とは異なり、スタイルという術語が不変的かつ一般的なものをも指し得るものとして用いられていることに注意しよう。

我々は、知覚する主体、また知覚される客体にもそれぞれの特殊なスタイルが存すること、そしてそれらが重なり合わないことを確認した。他方でその特殊なスタイルを持つ存在者は、全て同一のこの世界に属する¹⁷⁾。世界とはある特定のパースペクティブ、ある特殊な個人にとって包摂的な地平ではなく、可能的なものを含めた全てのパースペクティブにおいて感覚され得る、一切の存在者が属するものとされる。そして、そうした想定しうる全ての存在者が「遵守する」、つまり存在者である限りは避け難く従うべき「不変なスタイル」を指して、世界と呼び直される。それは存在者が存在する場であり、世界内に存在しているもの全てに課されるものでもある。

そうした、世界内に属するという意味で普遍的な存在様式としての不変なスタイルは、特殊な存在者それぞれのパースペクティブを「移行可能なもの」にするという。この「移行」とは、この固

有の身体を持った自己が原理的に同一化することのない他者の視点を取りうると共に、他者においてもまた移行可能であること、すなわち自己と他者の視点の可逆的な交換を可能にすることだと解釈できるだろう。そうである以上は、可逆性を成立させる「感覚的なもの」とは、世界内の存在者に不可避に課せられる不変なスタイルであることが帰結する。

第一節、第二節より、スタイルとは統一性の原理なのだった。全ての存在者は、世界内に与えられるというその与えられ方において不変なスタイルを有すると共に、それぞれの特異な統一性を自己自身そして他者へと与え合う。普遍と特殊の両者を射程に置くこのスタイル論を改めて「肉」概念に導入するとすれば、我々は肉の可逆性をどのように考えることができるだろうか。

4. 隔たりとしての「肉」——決して重なり合うことはない

ここで改めて、冒頭に喚起したメルロ＝ポンティ哲学への批判（絶対的一者との合一を目指すものに過ぎない）に立ち戻ってみたい。メルロ＝ポンティの哲学的探求とは、「直接的なものへの還帰や、存在者との合致・効果的融合や、原初の完全さの探求、既に失われ、再発見されるべきある神秘の探求なのではない」（VI, 160/169）とされる。というのも、「既に失われ、今ではその復元が困難になっている直接的なものは、もしそれが復元されたとしても、それ自身のうちにそれを再発見するに至った際の批判的諸過程の沈殿物を携えており、従ってそれは直接的なものではないだろう」（*ibid.*）からである。メルロ＝ポンティの哲学的立場は明確である。彼の哲学は、その哲学的手法が知覚に存しているとしても、既に失われた原初的神秘との直接的な合一を目指すものではない。というのも、知覚へと還帰するという反省的過程それ自体が言語的、時間的な経過を必然的に携えてしまうものだからである。それゆえ、哲学的反省において直接的なものの合致は初めから志向されていない。

それでは、そうした哲学的探究の端緒となる我々の知覚においては、何らかの存在者との合致は可能であるとされるのか。

メルロ＝ポンティによれば、それはすでに「現前」の水準においてさえ不可能である。原初的な現前においてあったはずの合一が哲学的反省において取り戻せなくなっているのではなく、そもそも原初的現前においてさえ合一が成立していないという、より根本的な水準での合一の否定が生じているのである。引用しよう。

あらゆる存在者はある隔たり¹⁸⁾の中で提示されるのであって、その隔たりはその存在者を知るための障害ではなく、むしろその保証だというまさにそのことが、そこで吟味されていない当のものなのである。ちょうど世界の現前が世界の肉の私の肉への現前であるということ、私は「それ〔私の肉〕によって存在している」のであり、世界ではないということ、これこそが、形而上学が合致にとどまるのだと言われるとたちまち忘れられる。（VI, 167/176）

ある対象を知覚する場合、その存在者についての感覚与件は統一性を有するものとして提示される。そして第三節で確認したように、ある対象を知覚するとき主体は対象を、主体自身のスタイル

によっても捉えるのであった。すなわち主体による対象の知覚の場面には、主体自身のスタイルと対象のスタイルの二つが媒介されており、両者はまさにそれぞれを統一するものによって隔てられている。各存在者のスタイルは紛れもなく知覚主体と知覚対象との合一を阻むものであり、「隔たり」である。しかし、知覚主体が自らのスタイルを伴ってしか知覚できないとしても、そうした主体と対象との隔たりこそが、知覚の可能性を保証するとメルロ＝ポンティは述べる。

こうしたことが可能であるのは、第三節で確認した通り、スタイルが、世界内の存在者である限りにおいて全ての存在者に共通の一般性（不変なスタイル）を担うものでもあるからだろう。知覚されるときに対象を対象たらしめているものとは何であろうか。何かを知覚する際、知覚対象が保有している統一性は、知覚する者の知覚においても保有されていなければならない。それゆえ、世界内の存在者として強られる不変なスタイルを通し、自己は他者の統一性を知覚するのだが、まさしく統一性の原理でもあるそのスタイルのために、それぞれの存在者の合致は阻まれる。普遍と特殊の双方を担うスタイル概念こそが肉の可逆性を下支えする原理だと言える。

我々は第三節で、肉とは存在者の存在様式としてのスタイルを指すものであると示した。ここから「世界の肉の私の肉への現前」とは、他者の統一性を与える他者のスタイルを、私の知覚において必然的に介入する私のスタイルを通して把握することであり、私と他者との間には、私及び他者によって倍化された各々のスタイルという隔たりが存在すると解釈できる。それゆえ、対象と合致することは現前の水準において既に不可能なのだが、そうした隔たりの根拠でもあるスタイルがなければ、そもそも知覚対象をそれとして知覚することができなくなる。だからこそ、この隔たりとしての肉こそが、存在者を知ることを可能にすると語られるのである。

我々は他者を知る際に、己自身のスタイル、ないし肉に依拠してしか対象を知覚することはできない。しかし、肉という隔たりを経てなお、むしろ肉を有するがゆえに、対象の知覚は可能である。その上でようやく知覚は、主体あるいは対象のどちらが可能にしたと言えるようなものではないと語られるのである。

結び

本稿において我々は、知覚対象の感覚モダリティ統合についてのメルロ＝ポンティ哲学の変遷を辿ることによって、身体的自己から他の「感覚的なもの」へと可逆的關係構造を拡張するための理論的根拠を解明した¹⁹⁾。第一に『知覚の現象学』において、知覚対象の多様な感覚的所与とその知覚的総合の議論を振り返り、感覚的所与の統一をなすものが主体・対象の双方に設定されていることを確認した（第一節）。『シーニュ』ではとりわけ対象の統一性を名指すために、対象についての感覚的所与をとりまとめる統一性を「スタイル」、そして存在者がスタイルを有することそれ自体を指して「肉である」と呼ばれることを析出した（第二節）。続いてスタイルが、この世界に存在している限り常にその存在者に伴われているという意味での普遍性と、同時にその存在者の特殊性の両方を指す概念として練り上げられてきたことを示した。ここから、知覚における主体・対象双方のスタイルの介入の問題が、肉の可逆性の議論と照応していることを導いた（第三節）。自己であれ他者であれ、一切の存在者はそれぞれの統一性を示すスタイルとしての肉を伴って存在する。

それは主体と対象のまったき同一化を阻むものであるが、しかしそうした肉なしでは主体は対象を知覚することがそもそも叶わない。本稿では、存在者のこうした普遍性と特殊性の両方を支持する体制としてスタイル論が導入されていること、それも知覚対象の多様な感覚的所与の統合の議論を引き継ぐかたちで展開されてきたことを示した（第四節）。以上により、これまで一者との癒合的合致のイメージを喚起してきた後期メルロ＝ポンティ哲学、とりわけ肉の可逆性を、むしろ統一性と多様性との緊張関係として提示することができただろう。

肉にスタイル論を読み込むことで我々は、多様なものとその統一、隔たりと同一性をめぐる緊張関係を考え抜き、複層的な世界を描き出すメルロ＝ポンティ像を提示する。スタイルによってそれぞれ個別化させられた「私」や、他の有機体や、テキスト、文化、事物、歴史、世界といった様々な水準で特有のものになっている互いに特異的な肉が、私をまさにその私に、他者をまさにその他者にするところのスタイルによって交流可能になる。そこには、事物に対する複数のアクセスの仕方があるのであり、単に唯一の神秘的な世界があるのではない。それを踏まえることで我々は、この世界が「それが含む個体のような意味では一つでもなければ、また同じ意味で、二つとか複数でもないし、何ら神秘的でもない」（VI, 154/162）という世界像へと歩みを進めることができるのである。

註

- 1) 高橋哲哉、『逆光のロゴス——現代哲学のコンテクスト』、未來社、1992年、p. 118。
- 2) Lefort, Claude, « Flesh and Otherness », in *Ontology and Alterity in Merleau-Ponty*, ed. by Galen A. Johnson & Michael B. Smith, Northwestern University Press, 1990, pp. 3-13, p. 12. またアンリは逆に、「肉」の「可逆性」は知覚対象を現出させる以外の現象性を持たず、主体は知覚対象に吸収されているために、メルロ＝ポンティの基本構図の描き出しには主体としての自己の契機が取り落とされていると批判する（村瀬鋼「隔たりと力——メルロ＝ポンティとアンリとの間のキアスム」『ミシェル・アンリ研究』第2巻、2012年、pp. 23-46）。確かに、自己知覚が問われないままで他者についての知覚を認め得るのだとすれば、それは形を変えた自他未分の一元論と化すことになるだろう。
- 3) 「肉」の特性として「可逆性」を取り上げる解釈は現在に至るまで研究上主流である。るフォール（1990）を始めとし、川瀬智之『メルロ＝ポンティの美学——芸術と同時性』、青弓社、2020年（pp. 115-116）など。
- 4) 例えばマディソンは、「肉」という主題を一なる原理への回帰ではなく、初めからすでに二元性を併せ持つ起源への回帰であるとする（Madison, G. B., « Du corps à la chair. Maurice Merleau-Ponty », in *Analecta Husserliana*, vol. 21, 1986, pp. 167-188）。ディロンは、可逆性それ自体が、「差異を含んだ同一性」（Dillon, Martin C, *Merleau-Ponty's Ontology : Studies in Phenomenology & Existential Philosophy*, Indiana University Press, 1988, p. 7）とし、同様にレヴィンは、「肉」に認められる「同一性」とは他者の眼差しや間主観的な獲得物を必要とするとして、やはり「肉」一元論に修正を加えている（Levin, David Michael, « Justice in the Flesh », in *Ontology and Alterity in Merleau-Ponty*, ed. by Galen A. Johnson & Michael B. Smith, Northwestern University Press, 1990, pp. 4-44, p. 41）。
- 5) 加國は、後期メルロ＝ポンティにおける他者との共現前及び他性についての論点を整理した上で、ル

フォールやレヴィナスによる絶対的他性の欠如という批判に対し、メルロ＝ポンティが文化や政治の次元では他者性を積極的に認めていることを指摘している（加國尚志「メルロ＝ポンティと他者の問題」『倫理学研究』昇洋書房、24号、1994、pp. 85-95, p. 91）。

- 6) 「肉」の「スタイル」としての側面を取り上げる先行研究としては、サントベールの一連の著作がある（例えば、*Être et chair. Du corps au désir : l'habilitation ontologique de la chair*, Vrin, 2013）。しかしこの研究は、スタイルを「身体イメージ」の延長として捉えることで、身体と肉との連続性を強調するものであり、本稿とは論点が異なる。
- 7) 感官に与えられる感覚的所与は比類ないが、それと同時にそこには「交流」——聞こえと見えは同じ一つ対象にかんするものである——がある。そうだとすると、このとき異なる感覚器官における異なる与件同士の交流がどのように起こるのか、ということは問題化され得る。ドゥルーズは、メルロ＝ポンティが多様な感覚諸水準の統一を考える際に有機体的な発想を手放さないとして批判する。（Deleuze, Gilles, *Francis Bacon : logique de la sensation*, Seuil, 1981[2002], pp. 45-47）。しかし、本稿で見るように多様な感覚諸水準の統一は単に「身体」に求められるとも言にくいものである上、メルロ＝ポンティの哲学的深化と共に導入されたスタイル論はそれに代わるものでもある。言い換えればスタイル概念を知覚に輸入することで多と一の交流が叶うことになるのであり、これは必ずしも有機体的な発想に基づかないのではないか。
- 8) 感覚的所与の独立性は、『見えるものと見えないもの』においても維持される。（VI, 175/186）
- 9) 知覚の統一化の原理的審級が超越としての事物（知覚対象）にあると見做される論拠となるのは、本文中でも引用した次の箇所「異なる感官の与件は同じ数だけの別の世界に属するとしても、それぞれが、その特殊な本質において事物を転調する一つの仕方である以上、それらは全てその意味の核によって互いに交流する。」（PhP, 266/41）も該当するだろう。つまり、知覚において主体はむしろ対象の「意味の核」に同調しているものであり、主体の身体の不透明性は、病理を伴わない身体においては十分には問題化されていないのではないか。メルロ＝ポンティの身体の透明性については、村瀬鋼「自分が身体であるというこの唯一の事実から我々が自分の身体について持つ特異な知」——手袋の中の手について、『メルロ＝ポンティ研究』、第22号、2019年、pp. 41-60、pp. 49-50も参照。
- 10) 正確にはマルローの引用を用いたものだが、同意の意図は明らかである。（S, 67/ I 81）
- 11) 「仕方（manière）」は、ここでは「スタイル（style）」概念の言い換えと捉える。
- 12) 『世界の散文』における「間接的言語」では、「通り過ぎる一人の女性は私にとって、〔……〕その強さと弱さを持って、歩みの中に、あるいは地面を踏むヒールの音の中にさえ全面的に現前している一個の肉なのである。それ〔肉〕は女性的存在の、またそれを通して人間存在のアクセントに変化を与える特有の様式（manière）」（PM, 84/86）であるとして、より端的にその女性の多様な現れ方に統一性を与える様式を「肉」と呼んでいる。
- 13) 主体と対象とが「肉」を共有していると述べる時、主体がそうであるのと同様に対象もまた「感じる者—感じられる物」という可逆性を有している必要は必ずしもない。例えば「世界の肉は、私の肉と違っておのれを感じることはない。それは感じられるものではあるが、感じるものではない」（VI, 298/366）と書かれることから明らかであるように、感じる者が感じられる物でもあるという、物質

と精神の両立的様態（両義性）のみを「肉」の特徴として取り出すことは、後期メルロ＝ポンティ哲学を評価するに際し不十分である。

- 14) この「スタイル化する (styliser)」という語は、スタイル生成の場面をも射程に入れた語であるだろう。引用箇所はスタイルの把握が問題となっている場面であるが、スタイルの知覚とスタイルの生成は同時に問題化されるものであり、存在論の問題へと移行することになる。
- 15) 『シーニュ』に収録された「間接的言語と沈黙の声」は、『世界の散文』「間接的言語」の修正版であるが、「間接的言語」においては次のように記述される。「[……] それ〔肉＝女性の様式〕が私のうちに、自らに相応しい共鳴器の体系を見出すがゆえに、私はそれをまるで一つの文章が分かるように分かるのである。したがって、すでに知覚がスタイル化しているのだ。」(PM, 84/86) すなわち、「間接的言語」の版では、女性のスタイルが私の中に女性のスタイルに相応しい体系的な様式を見出すことを、「知覚がスタイル化している」という状況として述べている。これは、知覚において対象のスタイルの方がむしろ優位にあり、主体のスタイルが対象のスタイルに侵略されるものとして考えられているか、あるいは主体のスタイルそれ自体の境位が検討の外に置かれているとも取れる。いずれにせよ、知覚における知覚主体のスタイルの位置づけは、この時期においては些か揺れていたと推測される。
- 16) この論点は、「触れえぬもの」「見えないもの」、また「権利上見えないもの (invisible de droit)」として『見えるものと見えないもの』においても論じられる。(VI, 303/373 を参照。)
- 17) 『シーニュ』においてはスタイルの典拠としてマルローの『空想美術館』(『芸術の心理学』第一巻)の議論が取り入れられているが、フッサールの「類型」概念も理論的源泉の一つであった。フッサールとの関係については、酒井麻衣子『メルロ＝ポンティ——現れる他者／消える他者「子どもの心理学・教育学」講義から』(昇洋書房、2020年) pp. 68-72 を参照。
- 18) 原語は distance であり、écart に充てられることが多い「隔たり」と訳し分けをすべきかもしれないが、文脈上 distance が écart の言い換えとして使われていると推測されることを踏まえ、「隔たり」に統一した。
- 19) 「多様の統一」の観点において、事物の感覚的総体の共可能性から肉の「可逆性」なかでも自他問題へと論を展開することは、知覚における対象（とりわけ、事物と他人）の異同の問題を提起するかもしれない。この点については、芸術作品という統一された身体を参照軸に、別稿で改めて検討したい。

文献略号表

メルロ＝ポンティのテキストの引用に際しては、以下の略号を用い、続けて原著頁数と、邦訳がある場合には対応する邦訳頁数を記す。また邦訳が複数巻にまたがって掲載されている場合にはローマ数字にて掲載巻を記す。引用者による補足や省略は □ によって表す。

Merleau-Ponty,

PhP : *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945 / 『知覚の現象学』第二巻、竹内芳朗・木田元・宮本忠雄訳、みすず書房、1974年。

S : *Signes*, Paris, Gallimard, 1960 / 『シーニュ I』竹内芳朗・粟津則雄・木田元・滝浦静雄・海老坂武訳、みすず書房、1970年〔1969年〕、『シーニュ II』竹内芳朗・佐々木宗雄・木田元・二宮敬・滝浦静雄・朝

肉の可逆性はいかにして可能か？
——「スタイル」論を手がかりに——（三宅）

比奈誼・海老坂武訳、みすず書房、1970年。

PM : *La Prose du monde*, Paris, Gallimard, 1969 / 『世界の散文』 滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1979年。

VI : *Le visible et l'invisible*, Paris, Gallimard, 1964 / 『見えるものと見えないもの 付・研究ノート』 滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、2018年〔2017年新装版〕。

Comment la réversibilité de la chair est-elle possible ? : en partant de la théorie de « style »

Moe MIYAKE

Cet article a pour but d'éclaircir l'argument de la réversibilité de la « chair » en retraçant la modification de la pensée de Merleau-Ponty sur l'intégration des modalités sensorielles de la perception. Chez le dernier Merleau-Ponty, la réversibilité dont l'exemple typique est le rapport touchant-touché, fonde l'accès possible à autrui et les perspectives multiples et compossibles. Cependant il est difficile de savoir comment la réversibilité interne du corps permet à la fois la communion avec autrui et son altérité. Pour aborder cette difficulté théorique, notre discussion se concentre sur l'intégration et la singularité des données sensoriels incomparables en reprenant le concept de « style » comme quelque chose qui résout la question. En lisant la réversibilité de la chair dans la perspective du style, nous présentons une nouvelle manière de communication qui n'est pas le retour à l'unité cohésive.